漱石『三四郎』美禰子の持参金

Junko Higasa

第 8 章。与次郎が金を失くした。『額(たか)で二十円、但し人のものである』その金は広田先生がこの前の家を借りる時分に敷金が不足していたため、野々宮さんが用立てたものだった。月初に広田先生に高等学校受験生の答案調べをした時の手当がようやく入り、野々宮さんに返済できることとなった。与次郎はその使いを頼まれたが、その金で馬券を買ってみんな擂(す)ってしまった。二週間ほど工面に奔走したが叶わず、三四郎の所へ借りに来たので、三四郎は田舎からの仕送りの金を貸した。しかし月末近くなっても返さない。困っている所へ与次郎がやってきて、「美禰子さんが用立ててくれることになった」と言う。但し与次郎には渡せない。『小川さんに御手渡し致しましょう』とのことだった。与次郎は『君取りに行けるかい』『取りに行かなければ、国へ電報でも掛けるんだな』『電報はよそう。馬鹿気ている。いくら君だって借りに行けるだろう』と畳みかた。美禰子・三四郎の一挙両得である。この訪問の機会を逃す手はない。

ここで押さえておきたいのは二人の性格である。与次郎はいい加減な印象はあるが、人に借金をしながらも小金は持っていて、広田先生の出世のために根回しもし、情報通でもある。三四郎は真面目で朴訥で世間に疎い。

三四郎は美禰子に好かれているのか愚弄されているのか、その本心がつかめず迷っているが、それでも金を借りに行くことにした。この時、美禰子の兄は彼女の持参金である金を貸すことを承知していた。ということは兄の結婚も美禰子の結婚もまだ決まっていない。そして美禰子と一緒に銀行まで行くと、美禰子は三四郎に通帳と印鑑を渡し、借りるべき金より多い「三十円」を引き出し、それを預かるように言った。その足で二人は「丹青会(たんせいかい)」の展覧会へ行く。そこで原口画伯と野々宮さんに遭遇する。美禰子は三四郎に何か囁いてから、二人に挨拶しに向かい、戻って三四郎と親し気にする。このとき三四郎は夫候補として二股をかけられているような気がした。

第 9 章。三四郎は与次郎の勧めで広田先生を売り込むための会合に出て帰る道すがら、与次郎に「己が金を返さないから、君が美禰子さんから金を借りられた」「あの女を愛しているんだろう」と言われる。『君、あの女には、もう返したのか』『いいや』『何時までも借りて置いてやれ』与次郎は三四郎に美禰子との接点を設け、お金を借りっぱなしにすることを勧める。「人間は自分が困らない程度に人に親切にすると善い心持ちがするから」と説明するが、彼女の持参金を握っておけば、他の結婚話を遠ざける一助となり、さらにそれは野々宮さんのためにもなる。『与次郎は愛すべき悪戯(いたずら)ものである』三四郎を応援しているのか、野々宮さんを応援しているのか分からない。三四郎は鈍い。金と恋と自分と野々宮さんが結びつかず、母に仕送りを頼んんだところ、大金を人に貸したことを心配した母は野々宮さん宛に「三十円」と長い手紙を送った。

三四郎が野々宮さんから現金を受け取った日、野々宮さんの妹のよし子には縁談が持ち上がっていた。よし子は兄の促がしに『知らないわ』と答える。三四郎は、その本意が「知らない人なので好きも嫌いもなく答えようがない」ということを会得した。

翌日、金を懐に入れて大学の講義へ出た三四郎に、与次郎が『金受取たりや』とメ

モを寄こす。三四郎は講義終了後に返事をする。『金は受取った、此処にある』『そうかそれは好かった。返す積りか』『無論返すさ』『それが好かろう。早く返すが好い』

ここで、金を『何時までも借りて置いてやれ』と言っていた与次郎は、『早く返すが好い』というように変化している。そして美禰子の行先である原口画伯の住所を教える。この時点で美禰子の兄の結婚が決まり、美禰子も結婚を急ぐ事情ができていた。

第 10 章。柿の実がなる秋。それは三四郎と出会った時の画が完成に近づくときである。画の完成―それは完了である。画と共に恋は完了することを示唆する。

広田先生の病気見舞いに立ち寄った後、三四郎は原口画伯のアトリエを訪ね、そこで画の完成に投げやりな美禰子の姿を見る。原口画伯は「自分の知っている男が細君が嫌になって離婚を請求したところ、細君は縁があってこの家に嫁いだので、たとえあなたが嫌だと言っても私は出て行かないと、承知しなかった」という話をする。そのとき美禰子から兄が近々結婚すると知らされる。三四郎の『すると貴方はどうなります』との問いに美禰子は『存じません』と答える。よし子が縁談に対して『知らないわ』と答えた意味を会得した三四郎は、美禰子の『存じません』を会得できなかった。兄が結婚するということは、美禰子は好き嫌いに拘わらず結婚しなければならないということである。疎い三四郎はその場で美禰子に金を返そうとする。この時点で美禰子の結婚は決まっているので、ここで受け取ることは誤解を招く恐れがある。

更に、原口画伯が三四郎に『小川さん。里見さんの眼を見て御覧』と言い、『何故余計な事を仰しゃる』と美禰子は言う。そう、今となっては遅いのだ。美禰子の眼はもう三四郎に向って働きかけない。その瞳の作用にも三四郎は気付かない。このアトリエでの会話の中には美禰子の諦念と三四郎の恋の終結が凝縮されているのである。

画のモデルが「まだ 1 時間ばかりかかる」という言葉の示唆にも反応せず、最後までいて美禰子と共に帰路についた三四郎。その途中で美禰子を迎えに来た紳士に遭遇する。それでも三四郎はそれが美禰子の結婚相手だと気付かない。金は返しそびれた。

第 11 章。三四郎のもとへ届いた母の手紙を見て、女文字であることから美禰子からの手紙だと思った与次郎は『君、里見の御嬢さんの事を聞いたか』と問う。そのとき与次郎に別用が生じ、会話はそれきりになってしまった。まだ三四郎は気付かない。

第 12 章。三四郎は、演芸会で与次郎が駆け寄った人物を見た。野々宮さん・よし子・美禰子である。そのとき三四郎は、他に連れがいないか気になった。けれどいつか見た紳士はおらず、原口画伯が現れた。しかしそのあと幕間で、美禰子とよし子が席を立って廊下で男と話している姿を見た。戸口に半分身体を出しているその男の横顔を見た時、三四郎の懸念は具象化して身に迫り、彼は席へ帰らずそのまま外へ出た。

その翌日、三四郎は熱を出した。見舞いに来た与次郎に「美禰子の結婚」について尋ねると曖昧である。『極まったように聞いたが、能く分からない』相手は野々宮さんではないし、不思議な話だという。与次郎は、よし子の相手が美禰子の相手と同じようなので、どちらが結婚するのか判別しない。よし子を見舞いに来させるからじかに聞いてみろという。与次郎は自分の口から話すのを避けた。そしてよし子の口から、自分が縁談を断った相手が、美禰子の結婚相手であるということを知らされる。そして風邪の治った三四郎は、美禰子の出かけた先の会堂で借りた金―持参金―を返す。

美禰子が行った金の運用は三四郎に功を奏さず、与次郎の水面下の奔走は三四郎と野々宮さんに功を奏さなかった。どこまでも臆病だった三四郎。どこまでも慎重だった野々宮。どこまでも大胆だった美禰子は、結局「金の効力」に敗れた。(2020.6.30)